

# X 2026年度 小論文

工学部 電子情報工学科

問題冊子（1～2ページ）

## 注意事項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- (2) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- (3) 解答は別に配付する解答用紙に正しく記入すること。裏面は使用しないこと。  
また、解答に関係のない語句・記号・落書き等は解答用紙に書かないこと。
- (4) 解答用紙上部の受験番号欄・氏名欄に受験番号と氏名を記入すること。
- (5) 問題冊子の余白等は適宜使用してもよい。

次の設問に答えよ。

問 学習や課外活動から得た経験やこれまでに読書等で得た見聞を踏まえ、生成 AI が情報システムやソフトウェアの開発をどのように変え得るか、また生成 AI と技術者の関係性がどのようなものになりそうか、自身の視点で筋道立て、800字程度で説明しなさい。

以下の参考資料は、小論文執筆のきっかけとして与えるものであり、小論文中で引用し、自身の肯定的、あるいは否定的意見を加えても構わない。また、参考資料に依らず、独自の論説を展開しても構わない。

参考資料：酒匂 寛, 「生成 AI が変革するシステム開発」, 日経 BP, 2024年  
(一部改変)

ソフトウェア開発に慣れていないと、生成 AI が出力するソフトウェア開発文書を見ても戸惑ってしまうかもしれません。そもそも細かい話は抜きにして「AI を使うとアプリケーションを素人でも作れるとか宣伝されていなかったっけ？」と思った人もいるかもしれませんね。その宣伝文句（「素人でもエンジニアにはなれる！」）は完全な間違いとは言えないものの、現時点（2024年9月）では、やや誇大広告と言えるでしょう。確かに経験が浅くても、ある程度のプロトタイプ（本物に近い模型のアプリケーション）を作ることはできますし、機能が限られたルーチン（プログラムの断片）を請け負って開発することもできるかもしれません。

しかし開発者が問題を解きたい人の「もやもや」から解くべき問題を探し、その解法を求めて、実装をし、その品質を保証するという流れが残る限り、まだしばらくは必要なシステムが勝手にどんどん作れてしまうということにはならないでしょう。

よく耳にすることだと思いますが、生成 AI はとても有能なものの、丸投げして問題を勝手に解決してくれるほどの能力はまだありません。なぜなら「何が問題なのか」をはっきり認識しているのは（認識する

ための作業を行えるのは) 結局人間しかいないからなのです。

発注者(解きたい問題を抱えた人)、受注者(問題を解決してあげる人)と並走する形で生成 AI が登場し、うまく使いこなせるか協力できるかで大きな違いが出ます。

生成 AI は、これまでのような単なる受身の道具ではなく、きめ細かな対話を行うことで力を発揮してくれるのです。

工学の幅広い分野で使われている言葉に、「ヒューマン・イン・ザ・ループ」(HITL: Human-in-the-loop) というものがあります。これは大きなシステムの一部にインテリジェントな人間を組み込み、大切な役割を果たしてもらおうという発想です。

これだけ聞くと、人間を工場の一部に組み込むチャップリンの「モダン・タイムス」的ディストピアを想像するかもしれません。しかし本来の HITL は「モダン・タイムス」が描くような人間性の喪失や労働者の搾取とは逆の方向性を持っています。むしろ、人間の専門性や判断力の価値を高め、より公平で透明性の高い社会システムの構築を目指しているのです。

人間が作り上げた大きなシステムの中に、「インテリジェント」な AI を組み込むという動きもこれからますます増えていきそうです。これはある意味「AI イン・ザ・ループ」(AITL: AI-in-the-Loop) とでも呼ぶことができそうです。AI は決して人間ではありませんが、ロボットにも愛称を付けて仲間扱いしてしまう日本人にとって、AI も一種の「仲間」として受け入れられていくようになるのかもしれませんが。

道具としての AI に、自分たちのシステム(ループ)の中でよい役割を果たしてもらうためには、人間の側も自分たちの仕事の進め方を客観的に見ていく必要があります。それが整理されることで、AI をうまく組み込んでいくことも可能になるのです。

